

稲作生産情報第6号

令和5年7月21日
青森県「攻めの農林水産業」推進本部

- 生育は平年より早まっており、低温に弱い「穂ばらみ期」を迎えています！
- 気温に応じた水管理をしっかり行おう！
- いもち病や斑点米カメムシ類の防除を徹底しよう！

1 県生育観測ほの生育状況

7月14日現在の生育は、草丈は平年と比較してかなり長く、㎡当たり茎数は「つがるロマン」はかなり多く、「まっしぐら」はかなり少なくなっている。

幼穂形成期は、平年と比較して、「つがるロマン」が7月10日で3日早く、「まっしぐら」が7月6日で4日早くなっている。

表1 県生育観測ほの7月14日現在の生育状況

品種名	地域 (地点数)	草丈(cm)			㎡当たり茎数(本/㎡)			葉数(枚)			幼穂形成期		
		本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年差	本年	平年	平年差
つがるロマン	津軽(4)	69.5	60.1	116	465	471	99	11.4	11.0	0.4	7/10	7/14	4日早
	県南(1)	67.8	61.2	111	753	493	153	10.7	10.6	0.1	7/11	7/12	1日早
	全県(5)	69.2	60.3	115	523	475	110	11.3	10.9	0.4	7/10	7/13	3日早
まっしぐら	津軽(6)	79.2	67.6	117	432	491	88	11.3	10.8	0.5	7/5	7/9	4日早
	県南(5)	71.7	64.4	111	417	463	90	11.4	10.5	0.9	7/7	7/12	5日早
	全県(11)	75.8	66.2	115	425	478	89	11.3	10.7	0.6	7/6	7/10	4日早
ほっかりん	下北(1)	62.0	56.6	110	507	459	110	10.8	10.0	0.8	7/11	7/13	2日早

(注1) 平年値は地点により異なり、「つがるロマン」は過去8～27か年、「まっしぐら」は同3～18か年、「ほっかりん」は12か年の平均値。

(注2) 平年は7月15日現在。

2 出穂期の見通し

7月17日以降の気温が平年並に推移した場合、出穂期は「まっしぐら」が7月26日頃から、「つがるロマン」が7月28日頃からと予想される。

(注) 農なび青森「水稻生育予測」で以下の条件で予測。

- ・「まっしぐら」を基準とした。
- ・各市町村の田植最盛期(県調査)を田植日(移植日)とした。
- ・田植時の葉数は3.3枚とした。
- ・気温データは最寄りのアメダスデータで、7月17日まで本年値、以降は平年値を使用した。
- ・「つがるロマン」は図中の暦日より2～3日程度遅れる。

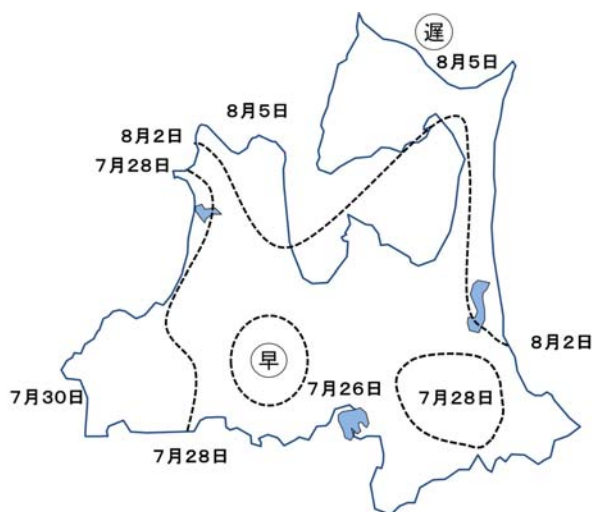


図1 出穂期の予測

これからの農作業と管理

1 水管理

(1) 穂ばらみ期

穂ばらみ期は出穂前20～11日頃で、この時期の低温は充実花粉の減少による障害不稔発生の原因となるため、日平均気温20℃以下、または最低気温17℃以下になると予想される場合は、15～20cm程度の深水管理を徹底する。入水の際は、水田水温が急激に低下しないよう徐々に深水とする。

高温が続く場合は、根の老化を防止するため、4cm程度の浅水管理とし、時々水の入換えを行う。

地耐力の低いほ場では、出穂期前1週間程度の落水で地固めをする。

(2) 出穂・開花期

出穂後10日間は5～6cm程度の水深とし、開花・受精に支障がないようにする。

この時期の低温は開花・受精不良による障害不稔の原因となるので、低温時（日平均気温20℃以下）には10cm程度の深水にして保温する。

高温の場合は、根の老化を防止するため、時々水の入換えや掛流しを行う。

(3) 登熟期

低温（最低気温15℃以下）が予想される場合は、10cm程度の深水にする。

高温の場合は、2～3cm程度の浅水とし、なるべく遅くまで水を与えるようにする。湿田や秋落田では、根の老化を防止するため、掛流しや土壤に軽く亀裂が入る程度の間断かんがいを行う。

(4) 落水時期

落水は、湿田では出穂後20～25日、乾田では出穂後30～35日を目安に行う。

落水が早すぎると層米などの増加とともに、胴割米の発生を助長し、品質が低下することから、砂質土や漏水の大きい水田では基準よりやや遅くする。

また、天候不順などで登熟が遅れている場合は、穂の熟色や稔実程度をよく観察しながら徐々に落水する。

2 病虫害防除

(1) いもち病

本年は、葉いもちの初発が、前10か年で最も早い6月30日に鱒ヶ沢町で確認され、その後、県内各地でも確認されている。

曇雨天が続くと発生が多くなるので、葉いもちの早期発見・早期防除に努め、穂いもちの感染源となる上位葉への感染を防ぐ。

穂いもちは予防防除を基本とし、防除適期を逃さないようにする。

ア 茎葉散布剤による防除

出穂直前（走り穂が見えたとき）と穂揃期（ほ場の8割の穂が出穂した時期）の2回散布を基本とする。

低温により出穂期間が長引いた場合は、穂揃期に達していなくても出穂直前散布7日後頃に散布する。

上位葉で葉いもちが多発している場合など、穂いもちの多発が予想される場合は、穂揃期5～7日後にも追加散布する。

イ 水面施用剤による防除

水面施用剤ごとに使用時期が異なるので、よく確認して使用する。

ウ 耐性菌対策

同一系統剤の連続使用は耐性菌の発生リスクを高めるので、以下の薬剤は育苗期から本田期を通じて年1回の使用にとどめる。

表2 同一系統剤とみなされるグループ

グループ	薬剤名
QoI剤	オリブライト剤、アミスター剤
その他	キタジンP剤、フジワン剤

(2) 稲こうじ病

穂ばらみ期の低温、少照、多雨で発生が多くなる。前年発生の見られた水田では、出穂前20～10日頃に薬剤散布する。

(3) 斑点米カメムシ類

県内で斑点米を発生させる主なカメムシは、アカヒゲホソミドリカスミカメとアカスジカスミカメで、気温が高いと発生量が多くなる。

防除は水田だけでなく休耕田の防除も徹底し、地域ぐるみでの実施や広域一斉散布により防除効果を高める。

出穂間近の草刈りは、斑点米カメムシ類を水田に追い立てることになるので行わない。ただし、あらかじめ草刈り予定の場所に殺虫剤を散布した場合は、草刈りしても問題ない。

また、畦畔の草刈りは、水稻の出穂7日前までに終える。

なお、出穂後に畦畔などの草刈りを行う場合は、周辺水田において、ネオニコチノイド系またはフェニルピラゾール系の殺虫剤散布直前から1週間以内をめぐり行う。また、合成ピレスロイド系及び有機リン系殺虫剤の場合は、1回目の散布後すみやかに草刈りを行う。

本年は7月中旬時点での発生量が多くなっているため、特に防除を徹底する。

ア 茎葉散布剤による防除

(ア) 1回防除体系

薬剤ごとに定められた使用時期に応じて適期防除を行う。

高温年など登熟後期に斑点米カメムシ類の発生が多い場合は、追加防除を行う。

(イ) 2回防除体系

合成ピレスロイド剤、有機リン剤などを使用する場合は、1回目の防除を穂揃期に行い、その7～10日後に2回目の防除を行う。

登熟後期に斑点米カメムシ類の発生が多い場合は、2回目防除の7～10日後に追加防除を行う。なお、天候不順により登熟が遅れる場合は、散布時期を遅らせる。

イ 水面施用剤による防除

水面施用剤は周辺作物への農薬の飛散が懸念される場合などに使用する。

薬剤ごとに定められた使用時期に応じて適期防除を行う。

天候不順により出穂期間が長くなると予想される場合は、各薬剤とも散布時期を5日程度遅らせる。

3 ホールクroppサイレージ(WCS)用イネ及び飼料用米の病害虫防除

(1) WCS用イネ

いもち病及び斑点米カメムシ類の防除には、「稲発酵粗飼料生産・給与技術マニユ

アル」(一般社団法人日本草地畜産種子協会)に掲載されている農薬を使用する。

なお、農薬の使用に当たっては、当該農薬ラベルに記載されている「収穫〇日前まで」という使用時期の「収穫」をWCS用イネの収穫(黄熟期)にそのまま適用するため、防除可能な期間が食用イネより1週間~10日程度早まることに留意する。

(2) 飼料用米

粳米のまま、もしくは粳殻を含めて家畜に給与する場合は、穂が見える前までに散布を終える。

出穂期以降に農薬の散布を行う場合には、使用できる農薬の種類や使用時期などを指導機関や契約先に確認する。

4 薬剤散布上の注意

クリーンライスや特別栽培米などは、それぞれ定めた農薬の使用計画を確認し、その範囲内で使用する。

散布の際は、薬剤の使用時期、量、回数を遵守するとともに、近隣の転作大豆、野菜、WCS用イネなどの農作物に飛散しないよう十分注意する。

農薬を使用した水田では、防除効果の安定と水質汚染防止のため、散布後7日間は落水や掛け流しは行わない。

農薬による蜜蜂への危害防止のため、薬剤散布前に周辺の養蜂業者に防除計画を知らせるなど積極的に情報交換を行う。

蜜蜂を放飼している地域周辺(蜜蜂の行動範囲は巣箱から2km程度とされている)では、農薬ラベルに蜜蜂に対しての毒性を示す「ハチ巣箱への散布禁止マーク」のついた農薬の使用を避ける。

ハチ巣箱への散布禁止マーク
(蜜蜂注意)



5 大雨・台風対策

大雨に備えて排水路や畦畔の点検を行う。

台風通過時に高温・乾風が予想される場合は、6cm程度のやや深水にして稲体の水分を維持し、乾燥による不稔の発生などを抑制する。

冠水や浸水した場合は速やかに排水し、土砂の流入などがあつた場合はすみやかに排除する。

倒伏した場合は、なるべく早く稲株を引き起こし、登熟の促進に努める。

海沿いの水田で潮風害を受けた場合は、直ちに散水して塩分を洗い流す。